

花 卷 市 博 物 館

研 究 紀 要

— 第 20 号 —

目 次

【資料紹介】 花巻市清水屋敷Ⅱ遺跡・大谷地Ⅲ遺跡出土の赤彩土師器

…………… 高橋 静歩（3）

太平洋戦争終結前後の花巻の状況について …………… 布臺 一郎（15）

令和 7（2025）年 3 月

序

花巻市博物館は、平成16年4月に開館し、本年度で開館20周年を迎えました。開館以来、花巻地方の考古、歴史、美術・工芸などを中心とした人文系博物館として、毎年資料の収集・保管・調査研究を進めるとともに、企画展や特別展等の開催、教育普及活動として出前授業や体験学習など様々な活動を行って参りました。

本年度は、開館20周年記念として特別展「アニメージュとジブリ展」を開催し、66日間で約8万人もの入館者があり、特別展としては最高の記録となりました。また、その期間中に当館入館者数も50万人を達成しております。10月から開催した特別展「縄文ワールド—写真家・小川忠博の世界—」では、考古資料の写真と実際の遺物との対比展示が好評をいただいたところであります。

さて、博物館として学芸員や研究職員等が日常的に行っている調査研究は、他の活動の基盤となるものであります。それらの成果は展示活動に繁栄させるだけではなく、「活字」という形で残していくことが重要であると考えています。本研究紀要には、花巻・北上地方が中心地とされる古代の赤彩土師器が出土した市内遺跡の考察、及び太平洋戦争終結前後の花巻の状況についてまとめた論考が掲載されています。今後とも調査研究活動の充実を図り、地域文化の向上・発展に寄与できるよう努力して参りたいと考えておりますので、ご意見等をいただければ幸いです。

最後になりましたが、本研究紀要を刊行するにあたり、ご協力いただきました皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、より一層のご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年3月

花巻市博物館

館長 中村良幸

【資料紹介】

花巻市清水屋敷Ⅱ遺跡・大谷地Ⅲ遺跡出土の赤彩土師器

花巻市博物館 高橋 静 歩

1. はじめに

古墳時代から平安時代にかけて日本各地では、赤色顔料で塗彩された土師器（以後、本稿では「赤彩土師器」と表記する）が作られていた。赤彩土師器は、古墳などの墓に副葬・供献されたもの、公的施設や集落で儀礼等に使用されたと考えられるものがある。特に奈良時代には、畿内周辺部において都城型の暗文が施された赤彩土師器杯を模倣・受容する形で広く存在していた。畿内地方の政治体制と直接的な関係を持たない東北地方北部でも、4世紀頃から赤彩土師器が土壌墓に副葬された形で散見されるようになり、5・6世紀頃には点在する集落遺跡からも出土している。さらに集落が増加する7世紀後半以降は、岩手県内陸部を流れる北上川の流域に展開する集落遺跡を中心に赤彩土師器が日常雑器に数点混在する形で出土する。それら赤彩土師器のうち、煮炊きによる使用痕など二次被熱の痕跡がほとんど見られない貯蔵形態の壺形土器の口縁部に条線などの赤彩文様が施され、胴部全面が赤彩されたものは、東北地方北部のおよそ7世紀後半～9世紀前半にだけ見られる特徴的な土器である。そして、これらの赤彩土師器の出土数は和賀川流域で最も多く、豊沢川流域がそれに次いで確認されている。このように畿内地方の政治体制と直接的な関係をもたない東北地方北部で独自の展開を見せる赤彩土師器は、古代東北史を検討する上で重要な資料の一つである。



写真1
花巻市内遺跡出土の赤彩土師器
(花巻市博物館所蔵)

本稿では、2002年度に発掘調査された花巻市東和町清水屋敷Ⅱ遺跡から出土した赤彩壺の未報告破片について閲覧する機会を得たので紹介するとともに、2021年度の発掘調査で新たに発見された花巻市大谷地Ⅲ遺跡出土の赤彩土師器についても資料実見をしたので、併せて若干の考察を行いたい。

2. 東北地方北部の赤彩土師器研究史

資料紹介の前に、これまでの古代東北地方北部における赤彩土師器の研究状況を以下にまとめて紹介する。古代東北地方北部の赤彩土師器のうち、壺の口縁部に特徴的な条線の赤彩文様をもつ土師器は、1980年代末から1990年代初頭では岩手県南部における土器編年に加えられ、いくつかの論考でも触れられており、その存在は識者の間では周知のものであった（伊藤1989、相原1990、鶴間1990）。この赤彩文様をもつ土師器について本格的な研究を行ったのは杉本良氏である。杉本氏は、北上川支流の和賀川流域に分布する遺跡から出土した赤彩土師器のうち、口縁部に特徴的な条線の赤彩文様をもつ壺形土器を中心に検討し、この土器について

「赤彩球胴甕」と呼称し、蝦夷の儀器と位置付けた（杉本1998、2001、2002）。筆者は杉本氏の成果を踏まえ、東北地方北部に範囲を広げて貯蔵形態の器種だけでなく、供膳形態の坏や高坏などの器種を含めた資料集成と検討を行った（高橋2007）。その後、帝京大学八王子キャンパス内にある東京都多摩市上っ原遺跡で9世紀第3～4四半期の甲斐型坏と東北地方北部の特徴を有した土師器を伴う竪穴建物から赤彩壺が出土した。この建物跡のカマド煙道は、東北地方北部で主体的にみられる長いタイプの煙道で、蝦夷の移民の住居と捉えられ注目を集めた（平野2013）。さらに、東日本大震災復興関連発掘調査によって太平洋沿岸部においても資料の蓄積が進んだことから、再び東北地方北部における赤彩土師器の検討が活発になった。米田寛氏・河本純氏、筆者らの共同研究では、赤彩土師器の検討時期を4世紀～9世紀に範囲を広げ、東北地方北部の赤彩土師器全体の実態を掴むための集成と編年、赤色顔料や土器胎土の分析等の検討を行った（米田他2017・2018・2019）。また、杉本氏は「赤彩球胴甕」以前の赤彩土師器を「赤彩精製土器」と区別し、その変遷の検討と和賀川流域を中心とした蝦夷の動態についての検討を行っている（杉本2017・2018・2020・2023）。その他、2020年に北上市立博物館、2022年に岩手県立博物館で赤彩土師器をテーマにした展示が開催されるなど注目を集め続けている。なお、北上市立博物館の展示に関連する誌上フォーラムでは「赤彩球胴甕」に関する検討が赤彩土師器を有する各地の識者によってまとめられた（北上市立博物館2021）。

3. 資料調査の方法

資料調査では下記について観察を行った。観察結果は表3・4にまとめている。

【赤 彩】赤彩の範囲や文様、色調（^{註1}）、顔料の質感（赤彩の厚さ、混入物の有無、水分量の様子）

【胎 土】色調、混入物の有無

【焼成・使用痕】スス、コゲ、黒斑の様子

4. 清水屋敷Ⅱ遺跡出土の赤彩土師器

（1）遺跡の概要

清水屋敷Ⅱ遺跡は、岩手県花巻市東和町安俵11区に所在し、猿ヶ石川右岸の氾濫平野上に立地する。2002年に砂利採掘に伴う発掘調査が行われた（東和町教育委員会2005）。調査の結果、縄文時代後期の配石遺構と埋設土器、平安時代の9世紀後半から10世紀前半の竪穴建物と土器焼成遺構が検出され、複合遺跡であることが分かった。赤彩土師器は、平安時代の住居状遺構から出土している。なお、清水屋敷Ⅱ遺跡の南側に近接する中嶋遺跡でも包含層から8世紀後半～9世紀前半の赤彩坏の破片2点（報告書掲載番号96、127）（以下、報告書掲載番号はNa○と表記する）と赤彩壺の小破



第1図 清水屋敷Ⅱ遺跡の位置（S=1/25000）

片1点(№161)が出土している(岩文振2010)。

(2) 赤彩土師器

赤彩土師器は、DH04住居状遺構から壺の破片が4点出土している。報告書では、4点のうちの一番大きな破片である頸部～胴部片1点が図示され写真が掲載されている(東和町教育委員会2005)。なお、出土層位等が記載されていないため、出土状況の詳細は分からない。今回、未掲載資料の3点について調査する機会を得たので実測図と写真で紹介する(図2・3)。未掲載資料の3点は、口縁部、頸部～胴部、胴部の小片で、掲載土器と胎土や赤色顔料の特徴が類似し、赤彩文様の連続性が窺えることから同一個体と考えられる。本稿図2では、口縁部片を未掲載資料1、頸部～胴部片を未掲載資料2、胴部片を未掲載資料3として掲載した。これら3破片と報告書掲載の破片を観察した結果、この赤彩壺の赤彩文様は、口唇～口縁部の内外面に0.8～1.3cm程度の太い横位条線が巡り、胴部外面が赤彩されていることが分かった。そして、胴部外面は赤彩後ミガキ調整^(註2)が施されていた。赤色顔料の様子は、色調が2.5YR5/6明赤褐色、細かい粒子で雑物の混入は観察されなかった。使用痕については、外面口縁部と胴部にススが付着しており、二次被熱の痕跡を確認した。内面に湯を沸かした際に見られるような喫水線、あるいは何かを煮炊きした際に付着するコゲなどは観察されなかったが、火にかけて使用された可能性がある。この赤彩壺の時期は、器形と赤彩文様の特徴から8世紀後半と考えられる。

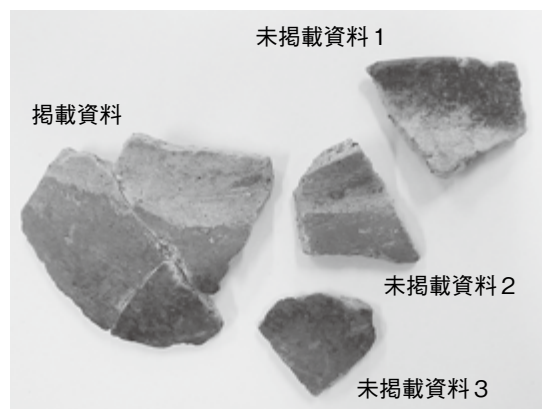
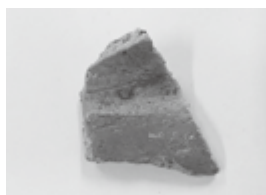


写真2
清水屋敷Ⅱ遺跡出土の赤彩土師器
(花巻市総合文化財センター所蔵)

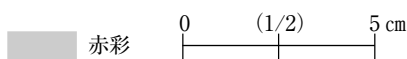
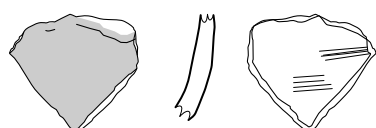
未掲載資料1



未掲載資料2

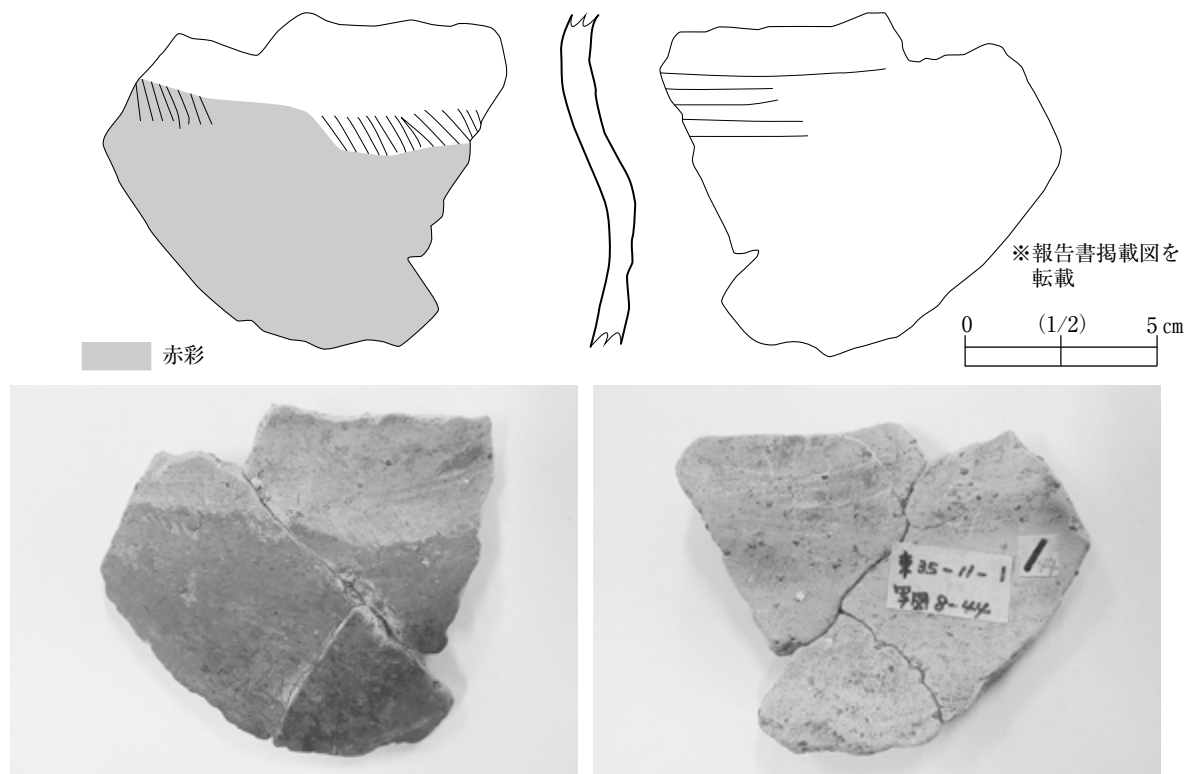


未掲載資料3



第2図 清水屋敷Ⅱ遺跡出土赤彩土師器壺片の実測図と写真(1)

掲載資料（第11図 DH04 住・出土遺物）



第3図 清水屋敷Ⅱ遺跡出土赤彩土師器壺片の実測図と写真（2）

5. 大谷地Ⅲ遺跡出土の赤彩土師器

（1）遺跡の概要

大谷地Ⅲ遺跡は、岩手県花巻市諏訪・大谷地内に所在し、豊沢川右岸の中位段丘上に立地する。令和3年度に花巻PAスマートインターチェンジ整備事業に伴う事前の発掘調査が行われた（岩文振埋2023）。調査区中央で環状の溝、調査区北東で弧状の溝が検出されている。この環状溝内部には大型竪穴建物や簡素な構造の掘立柱建物が配置され、外部に配置された小型竪穴建物や土器焼成遺構と区画する意図が推測されている。また、弧状溝以北では遺構が検出されていないことから、集落外部との区画を目的とした溝と想定されている。赤彩土師器は、大型竪穴建物跡・環状溝・弧状溝・小型竪穴建物跡・土器焼成遺構から出土している。花巻市域で初めて8世紀後半の赤彩土師器を伴う土器焼成遺構が確認されており、赤彩土師器製作の検討において注



第4図 大谷地Ⅲ遺跡の位置（S=1/25000）

目される発見があった。また、同遺跡内で行われた都市計画道路山の神諏訪線道路整備事業に伴う発掘調査においては、弧状溝の続きと考えられる溝跡1条が検出されている（岩文振埋2022）。以上、大谷地Ⅲ遺跡は出土遺物の様相から8世紀後半の集落跡と考えられている。

（2）赤彩土師器

赤彩土師器と報告されている坏11点、壺17点を中心に出土遺物の観察を行った結果、No86（SX04出土）の壺底部片のみ非赤彩資料と判断した。また、No105は観察を失念したので今後改めて実見したい。

【赤彩の様子】

坏11点のうち、外面全体を赤彩されたものは8点（No13、45、52、60、68、69、71、73）あり、そのうち内面黒色処理^{（註3）}されたものが3点（No13、45、52）である。その他に内外面赤彩と考えられるものが2点（No70、72）である。No53は、破片資料のため全体像は推測に過ぎないが、内面黒色処理された大型の坏で外面中位に太い横位条線が描かれていたのではないかと考える。

壺16点のうち、赤彩文様がわかる資料は11点（No7、20、35、36、47、48、77、80、85、105、123）ある。口縁部～頸部に太い縦位条線が描かれたものは4点（No7、20、47、105）である。未観察のNo105を除いて、それ以外の3点は口唇部が塗られており、横位条線の様相を呈す。このうち、内面にも太い縦位条線が描かれたものはNo20のみである。No20は縦位条線の幅が2.4～4.3cm程度とかなり太く、口唇部～口縁部内外面の横位条線も0.8～0.9cmと太く描かれている。口唇部～頸部に太い横位条線が1条描かれたものは4点（No35、36、77、80）である。No35は口唇部が塗られ、頸部に幅0.8cm程度の太い横位条線が描かれている。同じ遺構から出土したNo36は頸部の小片だが、赤彩文様と胎土の特徴からNo35と同一個体と考える。No77は、口唇部～口縁部に幅1～2cm程度の横位条線が描かれている。横位条線の一部は重なり、2条に見える部分があるが、勢い余って描いた雰囲気があるので1条の横位条線と考える。No80は口縁部片で、口唇部～口縁部に幅1.4～2cm程度の太い横位条線が描かれている。以上の口縁部文様がある赤彩壺のうち、胴部のある個体は、全て胴部外面が全面赤彩されていた。その他に、外面口唇部～胴部全体が塗られ、内面は口唇部～口縁部に0.5～1cm程度の横位条線が描かれたNo123と、外面胴部の中位に太い横位条線が描かれたNo85がある。

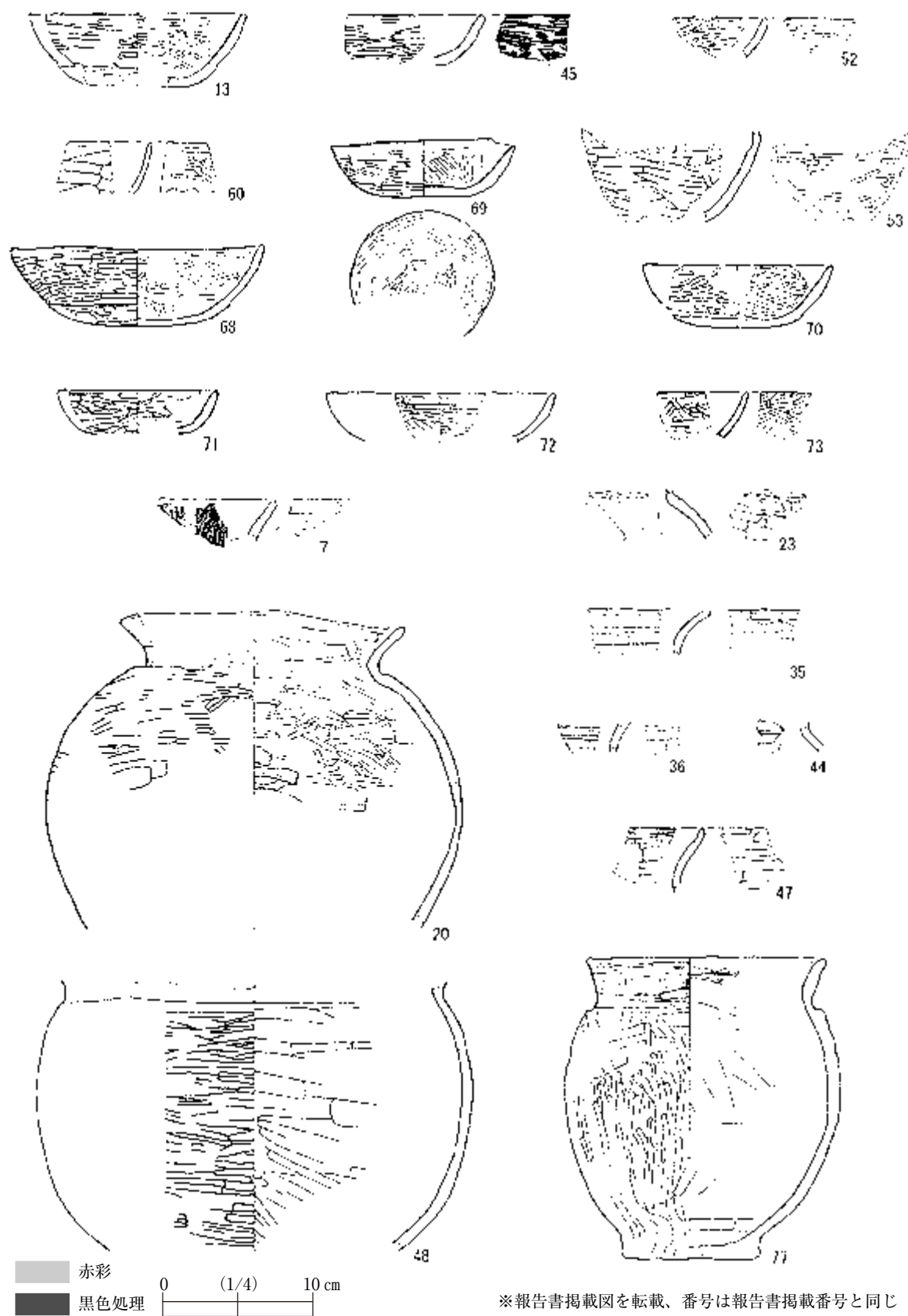
【赤色顔料の様子】

色調は、過去の調査で作成した分類（表1）に合わせて記載する（米田他2017・2018・2019）。

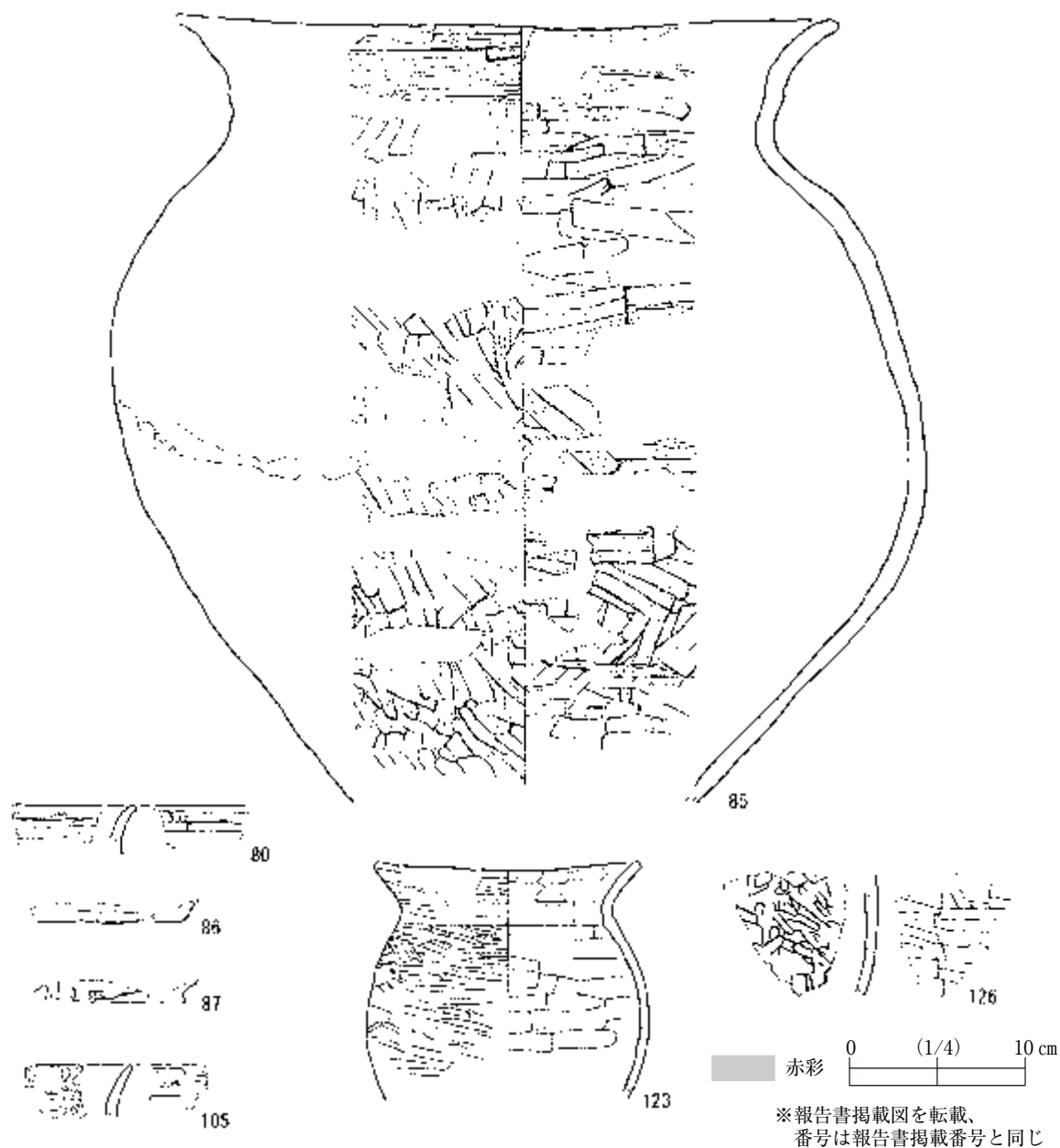
ア類赤色は3点（坏：No69／壺：表1 赤色顔料の色調分類

No77、123）、イa類赤褐色は12点（坏：No52、53、68、70～73／壺：No20、47、48、80、126）、イb類明赤褐色は3点（壺：No7、35、36）、ウ類橙色7点（坏：No13、45、60／壺：No23、44、85、87）である。イa類赤褐色の色調

分類		色 調
ア		赤色（7.5R赤～10R暗赤、赤、赤褐）
イ	a	赤褐色（2.5YR暗赤褐色、赤褐色、明赤褐色、にぶい赤褐色）
	b	明赤褐色（5YR赤褐色、明赤褐色、にぶい赤褐色）
ウ		橙色（2.5YR橙～7.5YR橙、にぶい褐色）



第5図 大谷地Ⅲ遺跡出土赤彩土師器 (1)



第6図 大谷地Ⅲ遺跡出土赤彩土師器 (2)

が主体的に観察された。なお、大谷地Ⅲ遺跡出土の赤彩土師器のうち、坏3点と壺4点について顔料分析が行われており、赤色顔料として濃度のあまり高くないベンガラ(Fe_2O_3)が検出されている(岩文振埋2023)。

質感についても過去の調査で作成した分類(表2)に合わせて記載する(米田他2017・2018・2019)。

表2 赤色顔料の質感分類

項目1	顔料混合の粘土と水分の割合	項目2	顔料と混合物の細かさ	項目3	塗布の厚さ
カ	粘土、水分ともに多い	Ⅰ	粗い	a	厚い
キ	粘土多く、水分少ない				
ク	粘土少なく、水分多い	Ⅱ	細かい	b	薄い
ケ	粘土、水分ともに少ない				

カⅠa類は12点（坏：No45、60、68～73／壺：No23、77、123、126）、カⅡa類は6点（坏：No13、52／壺：No7、48、80、85）、キⅠa類は2点（壺：No20、47）、キⅡa類は1点（壺：No35）、クⅡb類は1点（坏：No53）である。大谷地Ⅲ遺跡の赤彩土師器は、顔料に含まれる粘土や水分が多く、顔料が粗いあるいは顔料に混ぜた粘土などの混合物が粗いが、厚く塗るタイプのカⅠa類が主体的に観察された。

【使用痕】

被熱の痕跡がある資料を2点（坏：No53／壺：No20）確認した。No53は内面黒色処理の坏で、外面にススが付着していたが、内面にコゲなどの痕跡は観察されなかった。火災等に伴う被熱の可能性はある。No20は胴部外面にススが付着し、それに対応するように内面にコゲが付着していることから使用痕跡の可能性が高い。ただし、使用頻度は低いと見られる。

6. 若干の考察

清水屋敷Ⅱ遺跡と大谷地Ⅲ遺跡出土の赤彩土師器について、豊沢川流域を中心に花巻市域から出土した赤彩土師器と比較しながら若干の考察をする。豊沢川流域では、これまでに古館Ⅱ遺跡や熊堂古墳群に隣接する竪穴建物跡から赤彩坏が出土しており、他地域に比べて多い傾向であった（米田他2017、高橋2007・2021）。大谷地Ⅲ遺跡からも11点と一定量が出土していることから、豊沢川流域では、赤彩壺だけでなく、赤彩坏を一緒に使用した儀礼や祭祀が行われていたと想定される。

豊沢川流域の赤彩壺の口縁部文様は、古館Ⅱ遺跡や熊堂古墳群、下坂井Ⅰ・Ⅱ遺跡出土の赤彩壺に見られるような太い縦位条線が特徴的であった（米田他2017、高橋2007、北上市立博物館2021）。上記の遺跡よりもやや時期が新しいと考えられる大谷地Ⅲ遺跡と清水屋敷Ⅱ遺跡では、壺の口縁部文様が太い横位条線のものが確認された。先行研究で8世紀後半～9世紀の赤彩壺の口縁部文様は簡素化する傾向が示されており（米田他2018、杉本2018・2021）、大谷地Ⅲ遺跡と清水屋敷Ⅱ遺跡出土の赤彩壺に見られる口縁部の横位条線は口縁部文様の簡略化表現の一つと考える。なお、同様の赤彩壺は宮城県栗原市上戸遺跡内で地権者が採集した資料がある。この赤彩壺は、栗原市から令和6年9月1日に発行された「広報くりはら」にて紹介されているほか、米田氏・河本氏と筆者による共同研究においても観察表にて紹介している（米田他2018）。

顔料色調は、4～6世紀は赤色主体→7世紀後半～8世紀前半は赤色～赤褐色主体→8世紀後半～9世紀は赤褐色～明赤褐色主体というように、時期が新しくなると色調が明るくなる傾向を確認している（米田他2018）。8世紀後半の大谷地Ⅲ遺跡と清水屋敷Ⅱ遺跡出土の赤彩土師器は、赤褐色や明赤褐色の色調を主体とすることから、これまでの結果と矛盾しない傾向が確認された。

顔料質感は、一定量の資料がある大谷地Ⅲ遺跡で検討すると、豊沢川流域の古館Ⅱ遺跡で4割程度確認されていた濃厚な質感で厚塗りの傾向（米田他2018）が大谷地Ⅲ遺跡でも確認された。厚塗りで濃厚な質感は豊沢川流域の赤彩土師器の特徴の一つと捉えられる。

今回、火にかけて使用した痕跡を観察した赤彩土師器は、大谷地Ⅲ遺跡出土の壺No20と清水屋敷Ⅱ遺跡出土の赤彩壺で確認した。東北地方北部の赤彩土師器全体の事例は、豊沢川左岸の

古館Ⅱ遺跡D-22号住居跡出土の壺№195のみである。このような痕跡が確認された赤彩壺は非常に少なく、被熱頻度も高いものではない。赤彩壺は彩色された貯蔵形態の器種であることから、やはり煮炊きする使い方は例外的である。

7. まとめ

清水屋敷Ⅱ遺跡出土の赤彩壺は報告書未掲載の破片資料の実見により、猿ヶ石川流域に文様のある赤彩壺を初めて確認した。これにより、岩手県内陸部と沿岸部の中間地域における赤彩土師器の詳細が蓄積された。併せて、豊沢川流域で新たに発見された大谷地Ⅲ遺跡出土の赤彩土師器を交えた若干の考察を行い、8世紀後半の壺口縁部に施される赤彩文様の簡略化表現の一つとして横位条線があることが分かった。また、赤色顔料の様子について先行研究と同様の傾向を確認することができた。

最後になりましたが、本稿執筆に際し、資料閲覧等の便宜を取り図っていただきました方々に記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

金子佐知子、菊池賢

註

- (1) 赤色顔料の色調観察は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色標監修）を用いた。
- (2) 土器の器表面に赤色顔料をよく密着させるため、赤色顔料を塗った後にミガキ調整が施されるものが多数あり、赤彩土師器の製作技法の一つと考えられる。
- (3) 内面が黒い土器は、全国的に見られるもので、東北地方では6世紀後半から坏の内面を燻して黒くする技法が流行。水漏れ防止効果があるとされ、10世紀まで作られた。

引用・参考文献

〈報告書〉

※公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターについて「岩文振埋」と略し、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書」は省略して集数を記載する。

岩文振埋2010『中嶋遺跡発掘調査報告書』第547集

岩文振埋2022『令和3年度発掘調査報告書 館遺跡 柵沢Ⅱ遺跡 大谷地Ⅲ遺跡 ほか調査概報（8遺跡）』第735集

岩文振埋2023『大谷地Ⅲ遺跡発掘調査報告書』第740集

東和町教育委員会2005『清水屋敷Ⅱ遺跡発掘調査報告書—平安編—平成14年度（2002）』東和町文化財調査報告書第35集

〈論文・研究報告〉

相原康二1992「6古代の集落と生活—蝦夷の集落」『新版古代の日本⑨東北・北海道』角川書店

伊藤博幸1989「陸奥国の黒色土師器—岩手・宮城地域」『東国土器研究』第2号 東国土器研究会

北上市立博物館2021『蝦夷の赤い甕—最強の蝦夷は和賀川にいた—』誌上フォーラム研究報告第22号 北上市立博物館

杉本 良1998「岩手県北上盆地における蝦夷（エミシ）集団の動態—北上市藤沢遺跡の再検討から」『考古学研究』45-1 考古学研究会編集委員会

杉本 良2001「赤彩球胴甕再考（1）」『北上市立博物館研究報告』第13号 北上市立博物館

杉本 良2002「赤彩球胴甕再考（2）—分布とその傾向（和賀川流域編）」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』第2号 北上市立埋蔵文化財センター

杉本 良2017「赤彩球胴甕とは何か」『「俘囚・夷俘」とよばれたエミシの移配と東国社会』帝京大学文化財研究所・山梨考古学会

杉本 良2018「蝦夷（エミシ）の赤い甕—赤彩球胴甕の成立と変遷—」『北上市立埋蔵文化財センター紀要』第6号 北上市立埋蔵文化財センター

【資料紹介】花巻市清水屋敷Ⅱ遺跡・大谷地Ⅲ遺跡出土の赤彩土師器

杉本 良2020「赤彩球胴甕と毛抜形麻手刀」北上市立埋蔵文化財センター紀要 第7号 北上市立埋蔵文化財センター

杉本 良2023「赤彩精製土器から赤彩球胴甕へ一口縁部縦走多条線文の成立と展開」『岩手考古学』第35号 岩手考古学会

高橋静歩2007「東北地方北部の赤彩土師器から蝦夷集団の動向を探る」『岩手考古学』第19号 岩手考古学会

鶴間正昭1990「奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味」『古代学研究』第122号 古代学研究会

平野 修2013「東京都多摩市上っ原〈うわっぱら〉遺跡（多摩市No1遺跡）出土の東北系土師器について」『東京考古』31 東京考古談話会

米田寛・高橋静歩・河本純一・佐々木あゆみ・酒井野々子2017「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（1）

—石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、古館Ⅱ遺跡、千苅遺跡を中心に—」『紀要』第36号（公財）岩文振埋

米田寛・高橋静歩・河本純一2018「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（2）

—東北地方北部の赤彩土器を探る—」『紀要』第37号（公財）岩文振埋

米田寛・高橋静歩・河本純一2019「岩手県における古墳時代～平安時代の赤彩土器研究（3）」

『紀要』第38号（公財）岩文振埋

表3 赤彩土器観察表 (1) ※器面調整の表現：ナデ→ナ、ヨコナデ→ヨコナ、ハケ→ハ、ミガキ→ミ、ケズリ→ケ、黒色処理→黒

遺跡名	遺構	記載番号	器種	部位	器面調整		時期	表色・顔料分布			色調	色調分類	質感	質感分類	その他	黒変・ス・コガ	土色調	焼少量含有物	備考
					外面	内面		外面	内面	内面									
清水遺跡Ⅱ	D404住	1150	壺	口縁部～胴部	ハ→直布→ミ	ヨコナ、ナ	8c後半	(特)～口縁位条線幅1.0cm程度(体)直布	2.5YR5.6明赤褐色	イa	厚塗り	イa	ヤミa	外面口縁部にス、内面にスにス	10YR7/3Lにぶい黄褐色	Φ1mm程度の砂粒含む	胴～胴片のみ報告あり。胴部片は未報告だが、焼成後と同一個体と考えられる。 二次焼成、使用痕か。		
大谷地遺	S001 Q1埋土上位	7	壺	口縁部	ヨコナ→直布→直布面ミ	ヨコナ	8c後半	(口)縦位条線幅1.1cm程度を等間隔	5YR6/6明赤褐色	イb		イb	カ目a	外面口縁部に黒色処理に伴うス	10YR6/4Lにぶい黄褐色	Φ0.5～1mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	S004 Q3埋土	13	杯	口縁部～底部	直布→ミ	ミ、黒	8c後半	(口)～底直布	2.5YR6.6暗赤褐色	イ		イ	カ目a	外面口縁部に黒色処理に伴うス	10YR8/4L黄褐色	Φ0.5～1mmの砂粒少量含む			
大谷地遺	S004 Q3埋土・Q2/2層・Q4/4層	20	壺	口縁部～胴部	(口)ヨコナ→直布→直布面(胴)ヨコナ→直布→ミ	(特)～口縁位条線幅0.5cm程度(口)～底直布(胴)ヨコナ→直布→ミ	8c後半	(特)～口縁位条線幅0.5cm程度(口)～底直布(胴)ヨコナ→直布→ミ	2.5YR4.8明赤褐色	イa	細粒砂を含む水分少なめ厚塗り	イa	ヤミa	外面胴部にス、内面にスにコガ	10YR8/3L黄褐色	Φ0.5～1mmΦ0.5～1mm程度の砂粒含む	二次焼成、使用痕か		
大谷地遺	S003 Q1埋土上位	23	壺	胴部上位	ナ→直布→ミ	ナ	8c	(特)直布	5YR6/6暗赤褐色	イ		イ	カ目a	外面口縁部に黒色処理に伴うス	10YR7/4Lにぶい黄褐色	Φ0.5～3mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK13 埋土上位/下位	35	壺	口縁部	ナ→直布→直布面ミ	ナ→直布	8c	(特)直布(口)縦位条線幅0.8cm程度	5YR6/6明赤褐色	イb	水分少なめがすれめ厚塗り	イb	ヤミa		10YR8/3L黄褐色	Φ0.5～2mm程度の砂粒含む	N36と同一個体か		
大谷地遺	SK13 埋土上位	36	壺	口縁部下位	ナ→直布→直布面ミ	ナ	8c	(特)直布(口)縦位条線幅1.2cm程度	5YR6/6明赤褐色	イb		イb			10YR7/3Lにぶい黄褐色	Φ0.5～2mm程度の砂粒含む	N35と同一個体か		
大谷地遺	SK28 埋土	44	壺	口縁部～胴部上位	(口)ヨコナ(胴)ナ	ナ	8c	(特)直布	5YR6/6暗赤褐色	イ		イ			10YR7/4Lにぶい黄褐色	Φ0.5～2mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK30 埋土上位	45	杯	口縁部	直布→ミ	ミ、黒	8c中盤～後盤	直布	5YR6/6暗赤褐色	イ	細粒砂を含む厚塗り	イ	カ目a	外面胴部下位～胴部ス	10YR7/4Lにぶい黄褐色	Φ0.5～2mm程度の砂粒含む	二次焼成		
大谷地遺	SK30 埋土上位	47	壺	口縁部	ナ→直布→直布面ミ	ナ→直布	8c後半	(特)直布(口)縦位条線幅0.2cm程度(口)縦位条線幅1.0cm以上等間隔	2.5YR5.6明赤褐色	イa	細粒砂を含む厚塗り	イa	ヤミa		10YR7/4Lにぶい黄褐色				
大谷地遺	SK35 埋土下位・検出	48	壺	口縁部下位～胴部	(口)ヨコナ→直布→直布面(胴)直布→ミ	(口)ヨコナ(胴)ヨコナ	8c後半	(口)直布(胴)直布	2.5YR5.6明赤褐色	イa		イa	カ目a	外面胴部下位～胴部磨耗	10YR8/3L黄褐色	Φ2～3mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK58 埋土上層	52	杯	口縁部	直布→ミ	ミ、黒	8c	直布	2.5YR5.6明赤褐色	イa		イa	カ目a	外面口縁部に黒色処理に伴うス	10YR8/3L黄褐色	Φ0.5mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK58 埋土上層	53	杯	胴部	ミ、直布	ミ、黒	8c	(特)直布(口)縦位条線幅0.2cm程度を等間隔	5YR6/6暗赤褐色	イ	水分多め薄塗り	イ	カ目a	外面口縁部に黒色処理に伴うス	10YR8/3Lにぶい黄褐色	Φ0.5～2mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK03 埋土上位	60	杯	口縁部	ヨコナ、直布→ミ	ミ	8c後半	(口)直布(胴)直布	5YR6/6暗赤褐色	イ	水分多め薄塗り	イ	カ目a	外面口縁部に黒色処理に伴うス	10YR8/3Lにぶい黄褐色	Φ1mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK08 埋土下位	68	杯	口縁部～底部	直布→ミ	ミ	8c中盤～後盤	直布	2.5YR5.8明赤褐色	イa	細粒砂を含む厚塗り	イa	カ目a	内外面に黒底い黄褐色	10YR7/4Lにぶい黄褐色	Φ0.5～1mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK08 埋土下位	69	杯	口縁部～底部	直布→ミ	ミ	8c中盤～後盤	直布	10YR4/6暗赤褐色	イ	水分多め薄塗り	イ	カ目a	内外面に黒底い黄褐色	10YR8/3L黄褐色	Φ0.1～2mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK08 埋土下位	70	杯	口縁部～底部	直布→ミ	ミ	8c中盤～後盤	直布	2.5YR5.8明赤褐色	イa	細粒砂を含む厚塗り	イa	カ目a	内外面に黒底い黄褐色	10YR8/4L黄褐色	Φ1mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK08 埋土下位	71	杯	口縁部～胴部	直布→ミ	ミ	8c中盤～後盤	直布	2.5YR5.8明赤褐色	イa	細粒砂を含む厚塗り	イa	カ目a		10YR7/4Lにぶい黄褐色	Φ1～2mm程度の砂粒含む			
大谷地遺	SK08 埋土	72	杯	口縁部～胴部	直布→ミ	ミ	8c後半	直布	2.5YR5.8明赤褐色	イa	細粒砂を含む厚塗り	イa	カ目a	内面に黒底い黄褐色	10YR8/4L黄褐色	Φ1～2mm程度の砂粒含む			

※器面調整の表現：ナデ→ナ・ヨコナデ→ヨコナ、ハケ→ハ・ミガキ→ミ・グズリ→ケ、黒色処理→黒

表4 赤彩土器観察表 (2)

遺跡名	遺構	図録番号	器種	部位	器面調整		時期	塗布特徴（口唇部：唇・口縁部：口・頸部：頸・胴部：胴・底部：底）							黒土色調	極少量含有物	備考
					外面	内面		赤色顔料塗布	色調	色調分類	質感	質感分類	その他				
														外面			
大谷地Ⅲ	SX08 埋土下位	73	杯	口縁部→胴部	塗布→ミ	ミ	8c後半	塗布		2.5YR5.6明赤褐色	イエ	細粒砂を含む	カ1a		Φ0.5～1mm程度の砂粒を含む		
	SX10 埋土下位/W/Eベタ55層 SD04 Q3埋土/Q3-2層/Q4-2層/見床	77	盃	口縁部→胴部（準完全形）	(口)ハ→ヨコナ→塗布→胴部（胴）ナ→ミ	(口)ヨコナ→胴部（胴）ナ	8c中葉～後葉	(口)横位赤褐色幅0.4～1cm程度 2重に塗布が重なる部分有		10YR4/6赤褐色	ア	細粒砂を含む厚塗りの	カ1a	外面胴部に黒炭	Φ1～2mm程度の砂粒を含む		
大谷地Ⅲ	SX10 埋土	80	盃	口縁部	ヨコナ→塗布	ヨコナ→塗布	8c	(唇→口)横位赤褐色幅2cm程度 幅1.4cm程度	イエ	2.5YR5.6明赤褐色	イエ		カ目a	少し磨耗	10YR8.4灰黄褐色		
大谷地Ⅲ	SX14 埋土	85	盃	口縁部→胴部	(口)ヨコナ（胴）ハ→塗布	(口)ヨコナ（胴）ハ	8c中葉～後葉	(胴)横位赤褐色幅1～2cm程度が一部	ウ	5YR7/4に近い褐色		薄のすりと塗布が所々ある	カ目a	外面口縁部→胴部に黒炭	10YR7/3に近い黄褐色		
大谷地Ⅲ	SX14 埋土	86	盃	底部	ヨコナ	ヨコナ	8c	非赤彩									
大谷地Ⅲ	SX14 埋土	87	盃	底部	ハ→塗布	剥落	8c	塗布		7.5YR6.6暗色	ウ			6cの磨耗	10YR8.3灰黄褐色	Φ1～2mm程度の砂粒を含む	
大谷地Ⅲ	SD01 埋土中位	105	盃	口縁部	未観察	未観察	未観察								未観察		
大谷地Ⅲ	SD02 埋土	123	盃	口縁部→胴部	(口)ヨコナ→塗布→ミ（胴）重ナ→ミ	(口)ヨコナ→胴部（胴）ナ	8c中葉～後葉	(口)横位赤褐色幅0.5～1cm程度	ア	10G5/8赤色	ア	細粒砂を含む厚塗りの	カ1a	内面胴部に黒炭	Φ1～3mm程度の砂粒を含む		
大谷地Ⅲ	SD04 埋土上位	126	盃	胴部	塗布→ミ	ナ	8c	塗布		5YR5/8明赤褐色	イエ	細粒砂を含む厚塗りの	カ1a	内面にコグ	10YR8.4灰黄褐色	Φ1～2mm程度の砂粒を含む	

太平洋戦争終結前後の花巻の状況について

花巻市博物館市史編さん室 布 臺 一 郎

1. はじめに

2024年9月末、最後の夏季休暇を取って福島県南相馬市を旅行した。出発の朝になって南相馬市がかつての原町市であったことに気が付き、確認するため花巻図書館で加藤昭雄著『後藤野―最北の特攻出撃基地―』を借りて現地に持参することにした。1945年8月9日に岩手陸軍飛行場、通称後藤野飛行場（以下、「後藤野飛行場」と表示する。）から特攻作戦に出発した3機の中の渡辺秀男少尉の飛行機が原町近郊に墜落、戦死したことを思い出したからである。本に書かれているとおり、陣ヶ岡公園墓地に「原町飛行場関係戦没者慰霊碑」があり、多くの戦死者とともに碑に刻まれていた渡辺秀男少尉の名前を見たとき、後藤野飛行場から原町までどのように飛行したのかを調べてみたいと思った。『後藤野』が出版されて30年が経つが、出版当時は閲覧が難しかった米軍側の史料がデジタル技術の進歩によって容易に入手できるようになり、例えば原町飛行場空襲の被害の度合いを、花巻空襲で使用された火力の量を用いて、計量的に比較することが可能となったので、本レポートでは渡辺秀男少尉を取り巻く状況を数値など客観的なデーターを用いて考察を試みる。

話が前後するが、前の月の8月、「グランパの戦争～従軍写真家が残した1千枚～」というドキュメンタリー番組を見る機会があった。太平洋戦争でアメリカ人従軍写真家であった祖父の残した1千枚あまりの写真を巡って、自身も写真家である孫であるマリアン・イングルビー氏が日本を取材するという内容だった。写真には硫黄島の激戦の様子などの悲惨な場面に加えて、戦後の進駐軍の占領の様子を伝える写真があった。その中に特殊慰安所に関するものがあった。筆者は花巻空襲に関する調査の過程で新聞の過去記事から、花巻でも特殊慰安所で働く女性を募集する広告記事の存在を目にしていた。しかし、この分野の先行研究については寡聞にして知らないものであり、今回かすかに残る文献から明らかにしてみることとした。

このレポートでは、花巻の民間宿舎から後藤野飛行場に通っていた特攻隊員の軌跡を辿りながら、特攻という非人道的な命令を身近な視点から考察するとともに、花巻に設けられた特殊慰安所の存在と関連する事件について報告する。そして、最後にこれら2つの出来事背景にある類似の構造について述べたいと思う。

2. 最後の宿舎となった花巻

1945（昭和20）年8月9日、後藤野飛行場から特攻に出撃した隊員たちと花巻の関りは前月の7月26日から始まる。「7月26日午後1時、矢田光三中尉を隊長とする神鷲第255隊8名の特攻隊員は、6機の99式双発軽爆撃機に乗り同僚に別れを告げて那須野基地を発った。（中略）午後2時頃岩手陸軍飛行場に降り立った。（中略）8人は台温泉に一泊し、翌27日から花巻町内の4軒の民家に分宿することになった。平沢医院―吉村公男中尉（22歳）鈴木紀生軍曹（22歳）箱崎醤油店―渡邊秀男少尉（22歳）出谷三治少尉（22歳）小

田島薬局－矢田光三中尉（21歳）石井博伍長（19歳）佐藤仁三伍長（18歳）丸美屋食料品店－加藤秀夫少尉（22歳）宿舍となる家庭に対しては、花巻町役場から概略次のような説明がなされていたという。この8人は那須野基地を既に『出撃』してきた特攻隊員であり、あと幾日かで『軍神』となるはずの青年達であること。その最後の時を家庭の暖かさの中に過ごさせたいという軍の特別の配慮で、花巻町内のしかるべき家庭が選定され、割り当てられたものであること。各家庭ではそのことを念頭に掛けて大切にお世話してほしいこと。」（加藤昭雄1995、p.p.112-113）筆者はこの部分を引用しながら、後述する「死ぬ係」と選別された特攻という、極めて非人道的な戦闘行為と、それに向かわせる前に家庭的な雰囲気を最後に体験させようとする「軍の特別の配慮」との間の、あまりにも大きな落差に名状しがたい嫌悪感と心の痛みの両方を強く覚える。

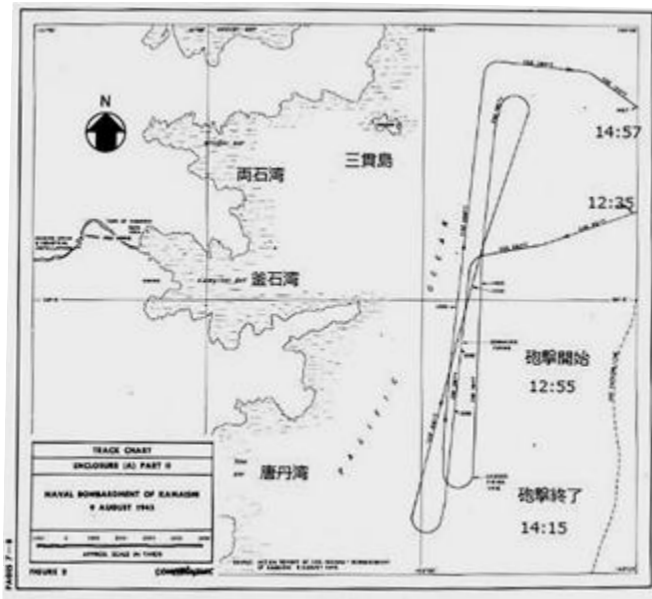
3. 特攻機の出発

1945年8月9日、釜石は2度目の米海軍艦隊による艦砲射撃により攻撃を受けた。釜石市郷土資料館のホームページによると、犠牲者283名、全焼1470という大きな被害であった。この2回目の釜石艦砲射撃の機動艦隊を攻撃するために、「午後になって黒磯の師団司令部から薄暮攻撃の指示があり、出撃隊員は吉村・加藤・渡辺・石井と決定し」、（加藤秀夫1996、p.11、下線は筆者による。）出撃時刻は、加藤昭雄（1995）によれば、「500キロ爆弾の積み込み等で出撃が遅れたというから、17時30分出撃予定だったものが、実際には17時50分の出撃となったと考えられる。」（p.124）と分析されている。そして、吉村中尉機（石井伍長同乗）、加藤少尉機、渡辺少尉機の3機が離陸したが、加藤機はエンジン不調のため後藤野飛行場に戻り、渡辺機は片脚が上がらないままの飛行となった。（加藤昭雄1995、p.p.124-127）ここで見慣れない言葉、「薄暮攻撃」について注釈を加えたい。「此の種攻撃は昼間攻撃の不利とする所即ち敵眼、敵火の下に於て敵に近接せんとする不利を免れ得る所の大なる利益を持つてゐるが、（中略）端的に言へば薄暮攻撃なるものは全然我が砲兵の威力を期待し得ない状況又は劣勢なる兵力を以て優勢なる敵に対し之を奇襲し得る状況等に於て用ひらるる特殊戦法と見るべきものと言へよう。」（琢磨研究会1942、p.117 下線は筆者による。）また、「薄暮ヲ利用シテ突撃ヲ実施セントスル場合ニ於テハ一、巧ニ暮幕ニ覆ハレテ近接シ突入ス」（軍事学指針社1940、11 攻撃其六、下線は筆者による。）これらから読み取れる「薄暮攻撃」の意義は、敵より戦力が劣っている場合に、暮幕に紛れて敵に近接、奇襲をかける戦法と考えられる。ところで、その戦力の優勢なる米軍機動艦隊の位置は実際どこだったのだろうか。加藤秀夫（1996）によると、「そもそも今回の出撃は、米軍機動艦隊の位置不明確のため、敵艦が発見できない時は名取飛行場へ帰還ということになっていた。」（p.11）とあるが、米軍機動艦隊の具体的な位置については言及されていない。筆者は米国国立公文書館の文書から釜石艦砲射撃後の米軍機動艦隊の位置を割り出したが、その位置は特攻機が搜索を命じられた海域からは大幅にずれた南東の方向にあった。つまり特攻機は全く的外れの位置を飛行し、米軍機動艦隊を搜索していたのである。

4. 米軍機動艦隊の位置

図1は釜石艦砲射撃を実行した米軍機動艦隊の航路図である。機動艦隊は時刻12:35と書かれている位置からこの海域に侵入し、南西方向へ進んだ後、釜石湾沖で方向を変え南進、12:55から砲撃を開始していることがわかる。その後唐丹湾沖で北に進路を変え、両石湾沖まで進み、南に方向を変え、唐丹湾沖で14:15、砲撃を終了、再び北進し、14:57と書かれた位置からこの海域を離れている。釜石艦砲射撃はこのように南北に移動しながら実行され、射撃終了後は大きく南東方向へ進路を変更し、日本軍が米軍機動艦隊の位置を見定めることは不可能であっただろう。

図1 Report of Ships Bombardment Survey Party (Enclosure A), Kamaishi Area. Report No. 80, USSBS Index Section 2 (日本語表記と時刻表示は筆者による)



なお、14:57の位置は国土地理院の計測ツールで調べてみると、両石湾の奥から約16km離れている。続いて図2は図1の後に機動艦隊が辿った航路である。

図2 COMTASKU-UNIT 34.8.13-Rep of the bombardment of Kamaishi, Honshu, Japan, 8/9/45 (下部の部分は17:56を示す位置を拡大したもの。)

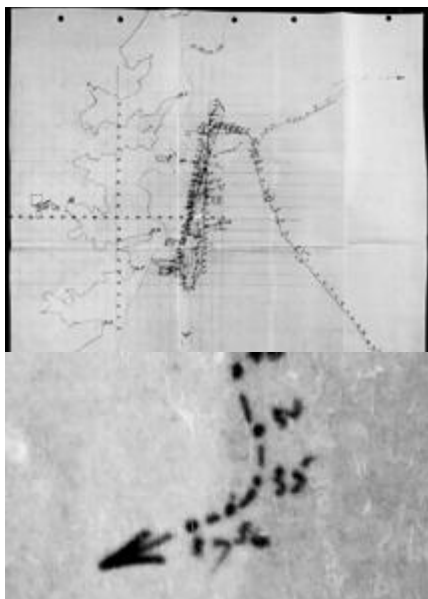


図2の航路の最後の時刻は17:56と書かれているが、上記の14:57の位置が両石湾の奥から約16kmであることから、航路図内での距離を計算してみた。図2において、両石湾から14:57までの長さは11cmあり、17:56の地点から陸地側への直線地は弁天崎、長さ19cmであったことから、17:56時点のおおよその位置は、弁天崎沖約28kmであると推定した。なお、図2は手書きであるため、誤差があることを付記する。加藤昭雄(1995)によると、大槌町在住の白沢弘泰氏が、大槌川河口から太平洋上に出る2機の飛行機を目撃しており、「2機の飛行機が超低空で飛んで来た。(中略)私の家から50メートル位の近くを、危なく鉄橋にぶつかると思うくらいに低く飛んで来たからよく覚えている。」との証言を

記録し、これら2機の飛行機を吉村機・渡辺機と推測している。(p.132) 本考察ではこの説に沿い、国土地理院のシステムによって後藤野飛行場から大槌川河口までの距離を計測してみたところ、その距離は約78kmとなった。この特攻で使用された99式双発軽爆撃機は「最高速度504km/h、航続距離2,000km」(朝日新聞社1970、p.31)であり、この性能を基に後藤野飛行場から大槌川河口までの飛行時間等をまとめた。

表1

平均速度	飛行時間	大槌川河口到着時刻	日没までの残時間
504km/h	9分17秒	18時頃	38分
400km/h	11分42秒	18時2分頃	36分
300km/h	15分36秒	18時6分頃	32分
250km/h	18分43秒	18時9分頃	29分

なお、この日の釜石の日没時刻は18時38分(「日出没時刻・方位角計算のページ」から算出)である。吉村機・渡辺機が大槌川河口付近まで飛行している時刻に近似である17:56時点での米軍機動艦隊の位置は上述のとおり弁天崎の東方約28kmにあり、また、大槌川河口と弁天崎の南北間の距離は約23kmと計測できるので、米軍機動艦隊を発見するためには少なくとも南北23km、東西28kmの範囲を搜索する必要があった。しかし、この日の天気は、記録が残る盛岡18時のもので「本曇 全雲量10 層積雲(注:10は10段階のうちで最も雲が多い状態を指す。また、層積雲は地上から2000メートルくらいまで現れる。)」(中央气象台1945)(注:太平洋沿岸にある仙台の気象状況も盛岡と同じ。)であり、大槌川河口付近から太平洋方面の気象状況が必ずしも盛岡や太平洋に面している仙台と同じであるとは言えないが、日没時刻の迫る中、もし、このような気象状況であるならば、米軍機動艦隊を発見するのは更に困難であっただろうと思われる。仮に吉村機・渡辺機の離陸が予定どおり17時30分であったならば、米軍機動艦隊搜索時間は計算上、日没まで49分から58分まで確保されるが、それでも十分な時間と言えるだろうか。上述の「米軍機動艦隊の位置不明確」に加え、離陸が20分遅くなってもなお特攻を続行したことが、この命令の更なる理不尽さを強く表している。

図3 吉村機・渡辺機と米軍機動艦隊の位置(国土地理院システムにより筆者作成)



5. 1945年8月9日の原町飛行場空襲

加藤昭雄（1995）は米軍の作戦報告書を考察した上で、「すなわちこの日、日本陸軍機は連合軍帰投部隊の視野には全く現れなかったのである。」(p.136) と結論づけ、陸軍に属する吉村機と渡辺機は米軍機動艦隊を発見できなかったと述べている。これは前章の考察と一致する。では、米軍機動艦隊を発見できなかった渡辺機は原町飛行場付近でどのような軌跡を辿ったのだろうか。渡辺機が墜落した8月9日とその翌10日、原町飛行場は米軍艦載機による空襲を受けている。米軍の報告書には郡山、原町、磐城の飛行場空襲に関して、「合計20機の敵航空機が破壊され、50機が損傷を受けた。これらのほとんどがカミカゼ航空機として多くの場面で使用されたものと類似の訓練機であった。」(VBF-88-War History, p.44、訳と下線は筆者による。)と戦果を報告し、空襲の目的が特攻に使用される可能性のある航空機の破壊や損害を与えることだったことがわかる。

それでは米軍の航空機戦闘報告書により、具体的な原町飛行場の状態を分析してみよう。下記の表2は8月9日の原町飛行場空襲に関する報告書から、飛行場への投下爆弾等のみの数量を表したものである。つまり周辺の紡績工場などへの投下爆弾等の数量を除いたものである。

表2

報告書番号	260ポンド爆弾	500ポンド爆弾	ロケット弾
VBF-86#25	12		48
VBF-88#32			10
VB-88#14	15	29	
計	27	29	58

爆弾の合計重量 = $260 \text{ ポンド} \times 27 \text{ 個} + 500 \text{ ポンド} \times 29 \text{ 個} = 21,520 \text{ ポンド}$
 $= 9.8 \text{ トン}$

一方、8月10日の花巻空襲で投下された爆弾等の数量は表3のとおりである。花巻空襲の報告書には他地域での投下爆弾等の内訳があるので、これらを除いた花巻への空襲に使用された爆弾等の数量を表したものである。

表3

報告書番号	260ポンド爆弾	500ポンド爆弾	ロケット弾
CAG6#50 外2		28	29

爆弾の合計重量 = $500 \text{ ポンド} \times 28 \text{ 個} = 14,000 \text{ ポンド} = 6.4 \text{ トン}$

花巻空襲では当時の花巻町の広い範囲が攻撃されたが、町の面積は「17,708反」(花巻市教育委員会1981、第1巻、p.684)とあり、1反が991.7㎡であるので、これにより換算すると17.6km²となる。このうち花巻空襲による物的被害は、「焼失面積7万坪(231,000㎡)、焼失個数673戸、全町戸数の何と19.2%」(加藤昭雄、花巻が燃えた日、1999、(株)熊谷印刷、p.19)である一方、原町飛行場の大きさは「2,900,000㎡(防衛研究所収蔵資料「陸空-本土防空-48飛行場記録 内地(千島、樺太、北海道、朝鮮、台湾を含む) 昭19.4.20 第1航空軍司令部)」、すなわち飛行場面積は2.9km²である。投下爆弾等と攻撃目標となった原町飛行場と花巻町の面積から単位面積当たりの投下爆弾等の量を比較したのが表4である。

(筆者注：花巻空襲において爆弾等が投下された面積は、実際には花巻町の行政面積より狭いものであるが、特定することができないので便宜上、行政面積を採用した。)

表4

攻撃目標	投下爆弾量(A)	ロケット弾数 (B)	面積 (C)	面積当たりの投下爆弾量 (A) / (C)	面積当たりのロケット弾数 (B) / (C)
原町飛行場	9.8トン	58	2.9km ²	3.38 (D)	20 (F)
花巻町	6.4トン	29	17.6km ²	0.36 (E)	1.65 (G)

表4の(D)は原町飛行場の1km²当たりの投下爆弾、(E)は花巻町の1km²当たりの投下爆弾であるので、(D) / (E)によって1km²当たりの投下爆弾比を求めると、花巻町に比べて原町飛行場には9.4倍の量の爆弾が投下されたと計算できる。同様に(F) / (G)によって1km²当たりのロケット弾数比を求めると、花巻町に比べて原町飛行場には12.1倍のロケット弾の砲撃があったことになる。以上の数値からわかるように、原町飛行場には花巻空襲をはるかに超える爆弾等が投下され、飛行場の状態は極めて劣悪であり、飛行場の機能として最も重要である、地表の平坦さは失われていたことだろう。このように執拗な攻撃を受け、破壊され尽くした飛行場上空に、渡辺機は到達したのである。

6. 渡辺機その後

後述する2024年末の南相馬市調査の折、長年原町飛行場関連戦没者の顕彰活動に従事してきた八牧将彦氏に面会し、今から41年前に制作された岩手放送のラジオ番組の台本を閲覧することができた。この台本に渡辺機の墜落の目撃証言があった。「八牧（通泰）さんが八方手をつくして捜しだしてくれた墜落現場へと向かいます。案内してくれたのは原町市郊外の農村で食品雑貨店を営む古内次郎さんという方。古内さんは、元航空技術兵で、一時、原町飛行場にいたこともある方でした。古内次郎（原町在住）墜落地点は旧原町飛行場の南およそ2キロ、原町市矢川原地内の山林でした。39年前のその日の夜、真先に現場に駆けつけた近所の農業・吉廻和夫さんの証言です。吉廻和夫（原町在住）あ那时的飛行機は、かなり長い間上空を旋回してから落ちた、と吉廻さんはいいます。」（岩手放送1984、p.13）また、加藤昭雄（1995）では「8時頃（?）、機種国籍もわからぬ双発機らしいのが、原町飛行場のまわりを旋回し着陸したい様子でしたが、照明設備や滑走着陸地帯も破壊されたままなので対応することもできず」（p.144）という渡辺少尉の同期であった鳥越正道氏の証言もあり、これら証言記録からは渡辺機は飛行場の場所や悪条件も把握しながら、どこか適切な場所に着陸を試みようとしていたのではないだろうかと考えずにはいられない。また、この日の原町の日没は釜石と同時刻の18時38分であるため既に周囲は暗く、また、暦と天文の雑学というサイトから8月9日の月齢、すなわち月の満ち欠けを調べてみると、前日8月8日が新月であり、9日は月齢1.1という月明かりがほとんどない状態だったことがわかった。このような悪条件でも原町飛行場まで到達できた飛行技術は非常に卓越したものだったと考えられる。

7. 南相馬市原町区矢川原地区の現地調査

2024年の暮れが押し迫った頃、原町飛行場空襲についてかねてから情報交換している福



写真1 追悼碑（「特操2期殉職地渡辺秀男少尉静岡県」と書かれている）（佐藤健太氏撮影）

島民友新聞社相双支社の佐藤健太記者より、渡辺機が墜落した場所にある追悼碑についての情報が寄せられた。上述のラジオ番組の台本に登場する吉田和夫氏の家族の案内でその場所を突き止めたという知らせだった。場所は南相馬市原町区矢川原地内大畑ため池南方の山林とのことであった。

筆者は是非この地を訪れたいと思い、佐藤記者の案内による現地調査を計画したが、年内の日程調整がつかなかったため、独自にこの場所を探すこととし、2024年12月22日に追悼碑の西約10メートルのところまで到達することができた。しかし、この場所はため池の周囲を野生動物防止のための電気柵が覆い、関係者の許可がなければ中に立ち入ることのできない場所であった。

写真2 追悼碑に最も接近した筆者の位置から撮影



図4 筆者の位置と追悼碑の位置



追悼碑に最も接近できた位置（図4中央の+印）は、北緯35分47秒、東経140度56分52秒であり、追悼碑はこの位置から109度東、約10メートル先と見積もった。なお、筆者の位置の標高は41.3メートルであった。

8. 渡辺機墜落の別原因の考察

加藤昭雄（1995）は「片脚が出たままの渡邊機は思うようにスピードも出ず、途中どこかで吉村機と別行動を取るようになったと想像される。（中略）この日、原町も朝から米艦載機による激しい空襲を受け、飛行場近くの紡績工場が爆撃を受けて炎上していた。飛行場を探す渡邊少尉はその明るい火に誘われて、原町のシンボルであった巨大な通信塔（高さ200メートル、1982年に解体されて今はない）を見つけ、懐かしい原町飛行場上空にたどり着いたに違いない。渡邊機は飛行場へ着陸を試みようとして旋回を繰り返したが、朝からの空襲で夜間照明設備は破壊されていた。片脚が出たままの渡邊機は何かの拍子にバランスを失い墜落した可能

性が高い。」(p.p.145-147)と渡辺機の墜落原因を推測している。この推測は渡辺機の墜落の目撃者たちの証言に基づいており、また、筆者が原町飛行場の状態を数値で分析した結果とも符合するので、筆者もこの推測の可能性は高いと感じている。ただ、一方で渡辺機の墜落現場を調査するにつれてある別の考えが生まれてきた。渡辺少尉は意図的にこの場所に来たのではないか、というものだった。

上述の「4. 米軍機動艦隊の位置」における臼沢弘泰氏の「危なく鉄橋にぶつかると言うくらいに低く飛んで来た」という証言は、「3. 特攻機の出発」において、薄暮攻撃の意義である「暮暮に紛れて敵に近接」と非常に良く合致しているように感じられる。特に、日没までの時間に西の方角から太陽を背にして飛んでくる機体は米軍機動艦隊からは見つけにくいものだろう。こう考えると薄暮攻撃の命令の意図を理解することは容易であるが、先に分析したような南北約23km、東西約28kmの広い海域をくまなく搜索する上では、ある程度の高度から面的に見渡した方が効率的であり、低空飛行による調査は直線的な視界の中での搜索であるため、効率は悪いものとなろう。結果、米軍機動艦隊を発見できなかった渡辺機は恐らくは、薄暮攻撃の命令に従い、低空飛行の状態のまま、かつて訓練を受けた原町方面へ飛行したのではないかと筆者は考えた。また、低空飛行であれば、空襲を受けた原町飛行場の地上の様子も十分に観察でき、その結果地上の悪条件と、更に片脚飛行でもあることから飛行場への着陸を逡巡したのも理解できる。一方、加藤昭雄(1995)は、渡辺機が「約3時間分の燃料を積んで」(p.137)いたとし、後藤野飛行場離陸が17時50分、島越正道氏の「八時頃(?)」に原町飛行場へ出現したこと、渡辺機墜落の時刻を「すでに9時近くだっただろう」(p.143)との吉廻和夫氏の証言とを総合すると、渡辺機は午後8時頃に原町飛行場上空へ到達し、その後1時間弱程度原町上空を旋回、墜落時刻周辺には燃料が尽きようとしていたと考えられる。

写真3 大畑ため池(西側から東側を撮影)



写真3は大畑ため池の西側から東側を撮影したものである。ため池に設置されている案内板には「受益面積41.7ha、貯水面23,800㎡という規模は原町区内の報徳仕法によって新築・修復されたため池の中でも規模が大きいため池のひとつ」と説明されている。因みに図5からは南北の距離が134メートルであることがわかる。

以上の考察から、渡辺機は卓越した飛行技術によって原町飛行場上空へ到達したものの激しい空襲により飛行場の機能が失われていることを観測し、また同機が片脚飛行状態であったことから飛行場への着陸を断念した。その後燃料が切れる1時間弱程度、原町上空を旋回し、燃料が切れるのを待って片脚飛行での着水の可能性に賭け、大畑ため池に不時着水を試みたのではないだろうか。渡辺機は燃料切れと言った不可抗力による墜落で

はなく、最後まで懸命の努力をした結果、選んだ場所が大池ため池ではなかったか、と考えるに至った。墜落地点の標高が41.3メートルという低い場所であることもこの説の裏付けるように感じる。今となっては検証が不可能であるが、一つの説として提示したいと思う。

太平洋戦争終結を目前にして渡辺秀男少尉はこのようにして戦死した。おびただしい数の兵士が死んだ。しかし、兵士たちが守ろうとした日本がまず始めたのは、次章のようなものだった。

図5 大池ため池の南北の長さ



9. 花巻における特殊慰安所

特攻による渡辺秀男少尉の戦死の日、8月9日、ソビエト軍が対日参戦し、長崎では広島に続いて原子爆弾が投下された。翌10日、花巻は空襲を受け、中心部は焼失、少なくとも「48名」(加藤昭雄2000、p.53)の犠牲者が確認されている。そして、8月15日。「玉音放送の3日後のことである。橋本内務省警保局長の名で、全国の地方長官宛に1本の無電が打たれる。「外国駐屯軍慰安施設と整備要項」と題するこの通達は、各地の警視長官に、進駐軍の「性的慰安施設」、「飲食施設」、「娯楽場」、それぞれの設置を要請し、かかる営業には「芸娼、公私娼妓、女給、酌婦、常習密売淫犯等の婦女子」を優先的に集めるよう求めるものであった。(中略) その結果、23日付けで特殊慰安施設協会(のちにRecreation and Amusement Association 略称R.A.A.)が設立された。」(藤原美紀子2005、p.12) 国全体がこのような方向に向かっている中で、花巻の状況はどうだったのだろうか。

戦後、評論家として名を馳せた松岡洋子は太平洋戦争末期、親戚を頼って花巻に疎開していた。松岡は、「日本が無謀な侵略戦争に敗北した1945年8月末(ママ)ごろだったと思います。私が疎開していた岩手県花巻にも占領軍がやってきました。(中略)「通訳を頼みたい」ということで、どこでどう調べたのか地元の警察署長から呼び出しがかかってきました。(中略)そのうち赤面しながら、「兵隊が女を世話しろっていうのだが・・・」とってそれを(進駐軍将校が)通訳してくれということです。」(松岡洋子1973、p.124)と書いている。なお、昭和20年9月18日付花巻警察署長発岩手県警察部長あての報告書にはこの面会日は去ル9月17日と書かれている。



写真4 連合軍関係情報綴・特高課(出典:国立公文書館アジア歴史センター)

このような占領軍の要求に花巻はどのように対応したのだろうか。「至急募集 酌婦50名(進駐軍慰安)

前借その他の相談に応じます 経験者、未経験者を問わず優遇す 花巻温泉台温泉料理店組合
「特殊慰安施設同盟会」(新岩手日報.1945-9-26、朝刊、p.2 下線は筆者による)同様の広告が
9月30日と10月1日の計3回掲載されているほか、盛岡については9月16日に同様の広
告の初出、宮古についても花巻の広告と同時にその後複数回募集広告が出されていた。この新
聞広告を裏付ける内容が岩手県医師会史編纂委員会(1980)にあった。1978(昭和53)
年12月1日、盛岡市で行われた「のり越えた苦難の道」と題する岩手県医師会座談会でのや
り取りである。「三浦 花巻では進駐軍とのトラブルは? 佐藤(隆)ありました、ありました。
彼らは花巻温泉に進駐していたのですが、やはり慰安所をつくれとやってきたので、日本はア
ンタ方のおかげで民主化し、公娼制度はもうなくなった(ママ)のだからと断ったのですよ(笑
い)。しかし、かんじんの温泉内の業者たちが、商売がらみでパンパン宿をつくりまして、苦
心も水のアワでした。(中略)中には酒乱の下士官が市民をなぐったり、婦女暴行をしてケガ
までさせ、被害者が私の病院に入院したような事件もありましたな。」(p.252 下線は筆者に
よる。なお、公娼制度は、GHQによる1946年1月24日に出された公娼制度廃止命令に
より廃止されたのが正しい。レファレンス共同データベース参照)なお、引用文中「佐藤(隆)」
とあるのは佐藤隆房医師である。

筆者はこの慰安所の場所を特定するため、国会図書館デジタルコレクションを検索したが、
文献から「花巻温泉にも戦時中の空爆にそなえて防空壕が掘られていた。その壕の中に蒲団を
放り込んで密室を作る。たちまちにして慰安所ができあがり」(佐藤邦雄1975、p.186 下線は
筆者による)というのみであり、その正確な場所を突き止めるに至っていない。

ここで先の佐藤隆房医師の弁の「婦女暴行」に関する部分に戻る。八木(1955)(筆者注:
八木英三は宮沢賢治小学校3年生時の担任で、後に自ら自分の童話の源には先生のお話が影響
していると語っている。(花巻市2025))は、「この進駐軍は全部大学生から成る軍隊だったので
自然に品位もあり乱暴をはたらく様な形式は更になく頗る平穩裡に事が運ばれて行ったので
あった。」(p.237)と述べ、金野(1986)による伊藤祐武美氏伝記にも「占領下においてよく
聞かれるようなトラブルもなく」(p.167)といった記述があり、岩手県医師会史が記録してい
るような事件は戦後を実際に見てきた両者の文献からは垣間見えない。そこで筆者は、写真4
が含まれる国立公文書館アジア歴史センターの文書を悉皆調査してみた。その結果、10月2
日付、花巻警察署長名で発出された「進駐軍ノ婦女ニ対スル悪戯事故発生報告」を見出した。
発生日は前日の10月1日、場所は稗貫郡湯本村となっており、具体的な発生場所などの情報、
また、被害者2名の氏名が書かれているが、引用に当たっては被害者のプライバシーに配慮し、
それぞれを秘匿する。被害者は酌婦A(21歳)、酌婦B(25歳)である。彼女たちが特殊慰
安所に関係していたかどうか記述はないが、報告書には次のように書かれている。

昨10月1日19時20分頃米軍(階級不明)1名来タリ「ドクターガ用ガアルから〇〇迄来
イ」ト称し前記2名ヲ〇〇別館に連行 2階35号室ニ招キ入レタルガ折柄同室ニ於テ飲酒中
ノ米軍人(将校ラシキモノ)4名 日本酒ヲ右兩名ニ強タル後 内1名Bを同室前廊下ニ連レ
出シ押倒シタル外姦淫シタル外 A同室ニ於テ 居合セタル軍人外其ノ後ニ入り来リタル2名
ノ合計5名(何レモ裸体)ノタメ数回押倒サレ遂ニ2名ニ姦淫セラレタルヲ以テ直チニ進駐軍

人事係ガースリー准尉ニ右事実ヲ通告シタル」(連合軍関係情報綴・特高課(出典:国立公文書館アジア歴史センター:A06030010400))

現在、特に沖縄県で頻発している米軍による性暴力が、戦後間もない花巻地域で起きたことを示す公文書である。この報告書の冒頭にある「ドクターガ用ガアルから〇〇迄来イ」という記述は重要である。なぜならば当時、進駐軍は性病の蔓延に危機感を覚え、性病検診に注力していた。戦後、性病検診を行っていた医師の談話には次のようにある。「進駐軍の連中は花巻温泉に遊びに行き、例によって女性を求めることがありました。これにもきっと検診を要求するに違いないと思い、これに対処して花巻に性病診療所をつくり、温泉の接客婦の検診や治療を行いました。」(岩手県医師会史編纂委員会1980、p.232) また、岩手県進駐軍政府の記録には”venereal disease” すなわち「性病」というキーワードが頻繁に登場している。1947年12月の岩手県進駐軍政府の月報には次のようにある。「性病診療所が花巻台温泉に設立され、診断と治療に用いられている。この地域は過去には性病の罹患が多かった。この診療所の開設に伴い性病の減少が顕著になることが期待される。」(Military Government:2-005,#722,訳は筆者による) このような背景を考えると加害者の進駐軍兵士が「ドクターガ用ガアルから〇〇迄来イ」と被害女性に対して発したことは、その女性たちが特殊慰安所に関係していた可能性を示唆するものと考えられる一方、性病罹患の恐れを抱く女性へ弱みに付け込むような虚偽の発言をし、巧妙に誘い出した上で性加害に及んだことは、計画的犯行であり、極めて悪質だと言わざるを得ない。筆者はこの事件の顛末を岩手日報電子縮刷版と岩手県進駐軍政府の記録から調べたが、関連記事は見当たらず、事件の顛末は不明である。しかし、この公文書の余白には「酌婦相当金額受領シタル模様ナリ」と書かれており、加害した将校らが金で解決した様子が伺える。

冒頭で触れたNHK番組「グランパの戦争～従軍写真家が残した1千枚～」では特殊慰安所内部で撮影された写真が紹介されていた。その中には進駐軍兵士と日本人女性との性的な写真も含まれている。このことについて太平洋戦争研究者の加藤昭雄氏に意見を聞いたところ、花巻温泉で写真館を経営していた方の家族からの証言として、「外人さんは変な写真を持ってきて(中略)恥ずかしくて現像してられなかった。」(2024.11.28の私信による)との教示があった。花巻でもNHK番組で放送されたような写真が存在している可能性を示唆するものである。

日本放送協会(2024)において、上述の写真家マリアン・イングルビー氏は次のように語っている。「女性たちにとっての最大の被害は国のために犠牲にされたことだと思います。彼女たちのその後の社会復帰も非常に困難で人生に大きな影響が及びました。」花巻でも内務省警保局長通達に従い、50名の女性が特殊慰安所に募集され、2名の女性が性被害に遭った。多くの兵士、民間人を死に至らしめた太平洋戦争が終わり、平和に向かっていくはずの時期になお、このように人間の尊厳を損なう行為が、戦争を推し進めた権力の側によって引き続き行われていたことを知ると、絶望的な思いがする。

10. なぜ花巻温泉だったのか

そもそもなぜ、花巻温泉に特殊慰安所ができたのだろうか。「やがて花巻町にも進駐軍が来ることになりその数は約300名、宿泊予定地は花巻高等女学校といふことであつたが松岡町

長は長岡警察署長と協議の上に花巻温泉の建物の方を使用して貰ふことにした。」(八木1955、p.236) この記事をなぞって書かれた金野(1986)には進駐軍の宿泊場所変更に関してももう少し詳しい事情が述べられている。この文献は上述した伊藤祐武氏、花巻町及び旧花巻市で長きに渡り議長を務めた人物、の伝記である。「進駐軍の総員は、約300名で、その宿泊予定施設として、町内の県立花巻女学校(現花巻南高校)を指定してきたのである。これは大変なことになる、町長や町会議員達は青くなった。何しろ“男子禁制”の女学校を、進駐軍の宿泊施設に使用するというのである。(中略)それに、町内の真ん中に300名ものアメリカ軍が泊るというのも、不安であった。(中略)伊藤を中心とした町議数名が、松岡町長に進言した。「(中略)宿舎が女学校では不安である。それよりも、花巻温泉の建物を使用する方が得策ではないか。」(中略)町長も、この進言には大賛成である。」(p.164) なお、上述の八木(1955)が言う「乱暴をはたらく様な」(p.237)ことはなく、「頗る平穩のうちに事が運ばれた」(金野1986、p.167)という記述は、進駐軍寄宿舍の変更の経緯の次に書かれ、この寄宿舍変更と進駐軍の人格の良さが、懸念されるような事件を防いだという成功談となっているが、現実には事件が起きたのは上述のとおりであり、意図的か否かはわからないが、ここに後述するような「不都合な事実」が隠れている。

「NIMBY」(ニンビー)という英語の名詞がある。メリアムウェブスター英英辞書によると「(刑務所や焼却炉といった)望ましいものと考えられないものの立地に反対すること。語源はNot In My Backyard、すなわち「自分の裏庭ではなく」の頭文字から。」(訳は筆者による。)必要と認識されつつも、自分の傍には立地してほしくないという考えを表す英単語である。進駐軍の駐屯地を、花巻町の真ん中から別の市町村である湯本村の花巻温泉へ変更した当時の花巻町の判断にはこのような考えが潜んでいなかっただろうか。

11. むすびにかえて

近現代日本女性史の研究家の平井(2014)は、「特殊慰安所の女性を「女の特攻」と呼んだ」(p.7)例を挙げた上で、こうした女性たちと、守られるべき良家の子女たちとの間に横たわる分断の構図があると述べている。(p.11) このことは先に挙げた内務省警保局長通達の進駐軍用施設設置に際し良家の子女ではなく、「芸娼、公私娼妓、女給、酌婦、常習密売淫犯等の婦女子」を優先的に集めるよう求める文言にも符号する。松岡(1961)の次の文章は、このような分断が松岡自身の中にすら無意識に存在していた可能性を窺わせる。「翌朝進駐してきた数十名の兵隊を集めてこの将校は訓示をたれていたが、「われわれの通訳はスワルモア(大学)出身である。彼女には絶対にふれてはならない」という言葉は私は不思議な気持ちできいていた。(中略)戦争とはそういうものだろう。占領とはそういうものなのだろう。」(p.115 下線は筆者による) 進駐軍将校は警察に対して女性の提供を求める一方、松岡のようなアメリカで大学教育を受け、通訳のできるような者と区別されるべき存在だと言い、これを聞いている松岡はその発言を「不思議な気持ち」の面持ちで聞きながら、占領とはそういうものなのだと、自然なものとして無批判に受け止めている。後に「安保を闘う婦人会議」や「侵略=差別と闘うアジア婦人会議」などを呼びかけて大きな集会を開き、新左翼の婦人運動の先頭を歩いたとされる(金森1975、p.187)松岡の批判精神はこの頃片鱗も見えない。

本レポートの前半では渡辺秀男少尉の特攻について報告した。特攻作戦に深く関わった軍人で「俺は死ぬ係じゃないから」と言った者がいたという。(神立2025)。この「係じゃない」というような発言は特殊慰安所に当てはめると「特殊慰安所の係じゃない」というように言い換えることができよう。実際の特攻作戦と「女の特攻」とも称された特殊慰安所はいずれも国家権力が推し進めたものであるが、それを進めた側の者と、それに従わされた者との間には、大きな分断があり、その背景には権力側が持つ、自分は「係じゃない」という強烈な選民意識と、その選民意識に基づいて自己以外の者を「係」に選別する強烈な差別が存在しているのが透けて見える。本レポートを執筆している2025年1月時点、報道やSNSは、ウクライナとパレスチナで起きている凄惨な戦闘行為を、国内では沖縄の米軍基地問題を伝えているが、これらの背景に分断と差別の構造が横たわっていることは論を俟たないだろう。しかし、一方、現場から伝わる鮮やかな映像は、かえって事案がどこか遠くで起きている出来事と錯覚させ、当事者意識を持つことが困難になっていることを自覚させられる。歴史学者の岡・小山・藤原(2024)は『中学生から知りたいパレスチナのこと』において、パレスチナ問題については研究者たちですら目を曇らせていて、その理由として「遠くの地域の「他人事」として起きている「かわいそうなこと」という倫理的問題としてこの問題を捉えていて」(p.56)と考察しているが、このことはひとりパレスチナ問題だけではないと思う。今回、太平洋戦争末期の花巻ゆかりの特攻隊員と、全国的に設置された特殊慰安所が花巻にも存在したというような、できれば知らないままにしておきたいような出来事、言わば不都合な事実が明らかになったが、このような身近に感じられる歴史を掘り起こすことができれば、地域の歴史がより大きな歴史と繋がり、大きな歴史や今起きている事柄をより身近に感じることができるようになると思う。すなわち遠くで起きている様に感じられる事柄に対しても当事者意識が高まることに繋がるだろう。このことを地域史研究の意義の一つとして挙げ、むすびとしたい。

12. 補遺

①1945年8月9日、10日の原町飛行場空襲を調べている中で、10日に実行された空襲に関する米軍の作戦報告書の中にこれまで見つかっていないと思われる原町飛行場の写真3点を米国国立公文書館(NARA)で発見したので紹介する。NARA VT-86 - ACA Reps Nos 9-13 - Air opers against Japan, 8/9-13/45

<https://catalog.archives.gov/id/77481171?objectPage=26> (閲覧2025/1/15)

②本稿をまとめるに当たり、つくば市の渡辺拓自氏、南相馬市の八牧将彦氏、福島民友新聞社相双支社記者の佐藤健太氏、南相馬市博物館主任学芸員森晃洋氏の4氏から多くの資料と情報の提供を受けたことを記し、御礼を申し上げる。

③花巻市博物館研究紀要第18号(2023年3月)において取り上げたエリザ・シドモアに関する解説板(所在:横浜外国人墓地資料館)に見られる誤りについて、筆者はレポートの中で修正の必要性を指摘していたが、2024年10月に筆者の指摘のとおり修正されたことがわかったので、ここに報告する。このことについて、シドモア桜の会 横浜 代表理事 梅本千晶氏及び同会員でジャーナリストの榎原美樹氏に深く感謝を申し上げる。

引用文献

- 朝日新聞社『航空70年史第2』朝日新聞社、1970
- 岩手県医師会史編纂委員会『岩手県医師会史上巻』岩手県医師会、1980
- 岩手放送『IBCラジオ・スペシャル「特攻機はどこへ飛んだか」』1984
- 岡真理・小山哲・藤原辰史『中学生から知りたい パレスチナのこと』ミシマ社、2024
- 加藤昭雄『後藤野-最北の特攻出撃基地-』川嶋印刷（株）、1995
- 加藤昭雄『追録花巻が燃えた日』加藤昭雄、2000
- 加藤秀夫「内地からの特攻」特攻隊戦没者慰霊顕彰会編『会報特攻』26、1996
- 金森トシエ『たたかう女100年』世紀社出版、1975
- 釜石市郷土資料館「艦砲射撃」<https://www.city.kamaishi.iwate.jp/kyoudo/>（閲覧2024/12/14）
- 軍事学指針社『最新歩兵戦闘法素解改訂』軍事学指針社、1940
- 神立尚紀『現代ビジネス「俺は死ぬ係じゃないから」・・・特攻作戦を採用した男が、終戦直後に言い放った「衝撃的な言葉」』<https://gendai.media/articles/-/122932?page=3>（閲覧2025/1/25）
- 国土地理院 <https://www.gsi.go.jp/>（閲覧2025/1/15）
- 国会図書館「レファレンス共同データベース：公娼制度の廃止」
https://crd.ndl.go.jp/reference/entry/index.php?page=ref_view&id=1000032208（閲覧2025/1/15）
- 国会図書館 Aircraft Action Report No.CAG#50 VB, VF[1945/8/10 <https://dl.ndl.go.jp/pid/4005115>（閲覧2025/1/15）
- 国立公文書館アジア歴史研究センター「特高警察例規集」
<https://www.digital.archives.go.jp/das/image/F0000000000000216629>（閲覧2025/1/15）
- 暦と天文の雑学https://koyomi8.com/reki_doc/doc_0250.html（閲覧2025/1/15）
- 金野静一『血風惨雨に耐えて伊藤祐武美伝』『伊藤祐武美伝血風惨雨に耐えて』編集刊行委員会、1986
- 佐藤邦雄『刑事弁護士』川口印刷工業（株）、1975
- 新岩手日報1945-9-26、朝刊、p.2
- 琢磨研究会『図上戦術研究』琢磨社、1942
- 中央气象台「天気図昭和20年8月」、1945
- Tenkijp「【十種雲形】雲は全部で10種類見分け方を形や高さから解説！～下層雲編～」
https://tenki.jp/suppl/tenkijp_labo/2021/08/01/30532.html#sub-title-c20251.7（閲覧2025/1/15）
- 日本放送協会「グランパの戦争～従軍写真家の残した1千枚～」
<https://www.nhk.jp/p/special/ts/2NY2QQLPM3/episode/te/N3N2Z4X618/>（閲覧2025/1/15）
- 日出没時刻・方位角計算のページ<https://koyomi8.com/sub/sunrise.html>（閲覧2025/1/15）
- 花巻市「賢治と文学」https://www.city.hanamaki.iwate.jp/miyazawakenji/about_kenji/1003947.html（閲覧2025/2/5）
- 花巻市教育委員会『花巻市史第1巻』（株）国書刊行会、1981
- 平井和子「日本占領をジェンダー視点で問い直す」『ジェンダー史学』第10号、2014
- 藤原美紀子「戦後岩手におけるGHQ政策と公娼制度の変遷 ジェンダーをめぐる身体史（前編）岩手女性史を紡ぐ会編『かたくりの花のように－岩手おらほのおなごたち－』（株）エムコーポレーション、2005
- 防衛研究所収蔵資料「陸空-本土防空-48飛行場記録 内地（千島、樺太、北海道、朝鮮、台湾を含む）昭19.4.20第1航空軍司令部」
- 松岡洋子「婦人解放運動の胎動を狙う」潮出版社編『潮』170号、1973
- 松岡洋子ほか『われら大正っ子第3』徳間書店、1961
- 八木英三『花巻町政史稿』花巻郷土史研究会、1955
- Merriam Webster NINBY <https://www.merriam-webster.com/dictionary/NIMBY>（閲覧2025/1/15）
- NARA Military Government:2-005 <https://catalog.archives.gov/id/402994315?objectPage=722#object-thumb--722>（閲覧2025/2/5）
- NARA VBF-86 - ACA Reps Nos 22-37 - Air ops against Japan, 8/8-15/45 <https://catalog.archives.gov/id/77481301?objectPage=6>（閲覧2025/1/15）
- NARA VBF-88 - War History <https://catalog.archives.gov/id/77649849>（閲覧2025/1/15）

NARA VBF-88 – War History <https://catalog.archives.gov/id/77481220?objectPage=17> (閲覧2025/1/15)

NARA VT-86 – ACA Reps Nos 9-13 – Air ops against Japan, 8/9-13/45 <https://catalog.archives.gov/id/77481171?objectPage=26> (閲覧2025/1/15)

Report of Ships Bombardment Survey Party (Enclosure A) , Kamaishi Area. Report No. 80, USSBS Index Section 2 COMTASKU-UNIT 34.8.13-Rep of the bombardment of Kamaishi, Honshu, Japan, 8/9/45

花巻市博物館研究紀要

第20号

令和7年3月28日 印刷

令和7年3月28日 発行

発 行 花 巻 市 博 物 館

〒025-0014

花巻市高松第26地割 8 - 1

TEL 0198-32-1030

印 刷 八 重 櫨 孔 版 社

〒025-0071

花巻市愛宕町 8 - 8

TEL 0198-23-2544

©花巻市教育委員会

2025

Vol.20

**Research Bulletin
OF
HANAMAKI CITY MUSEUM**

Red-colored *haji* earthenware excavated at Hanamakishi Shimizu

Yashiki Archaeological Site & Oyachi III Archaeological Site

..... Shizuho TAKAHASHI (3)

What was going on in Hanamaki around the termination of the Pacific War

..... Ichiro FUDAI (15)

EDITED
BY
HANAMAKI CITY MUSEUM

© HANAMAKI City Board of Education